

紹介

成蹊大学文学部学会編

責任編集 小林盾・吉田幹生

成蹊大学人文叢書11

『データで読む日本文化』

— 高校生からの文学・社会学・

メディア研究入門』

鹿野谷 有希

文学作品、アンケート、インタビュー、統計、雑誌などのデータを用いて、日本文化に関するさまざまな謎に迫る——二〇一五年三月に刊行された、成蹊大学人文叢書シリーズ最新作のコンセプトである。本学文学部の現代社会学科・日本文学科の教員七名が、一人一章ずつ、それぞれ異なるテーマを扱っている。本稿では、日本文学科の教員が担当したテーマを紹介してみよう。

第一章では、木谷真理子氏が「源氏物語」をテーマに、「なぜ原作と絵画化がくい違うのか」を、「文学・絵画作品」のデータを用いて、「文学・メディア研究」の視点からアプローチしている。『源氏物語』の中でも特に有名な、若紫巻の光源氏が北山で少女を見出す場面を取り上げ、その絵画化作品（『源氏物語絵色紙帖』若紫（土佐光吉 京都国立博物館蔵）、「慶安本絵入源氏物語」若紫（山本春正 成蹊大学図書館蔵））と比較し、物語と絵画というメディアの違いや、『源氏物語』およびその絵画化作品の特徴を論じてい

る。また、原作と漫画『あさきゆめみし』（大和和紀氏）を比較することで、若紫という少女の描かれ方の違いを浮き彫りにし、なぜ漫画では原作と違った描かれ方をしているのか、その理由に迫っている。

本章では、原作から絵画化する場合にいく違う理由について、分かりやすく、詳しく解説されているが、それは原作の小説を読んだ後に映画化・ドラマ化された作品を見たとき、あるいは、映画化・ドラマ化された作品を見た後に原作の小説を読んだときに感じるく違いにも通ずるだろう。原作と映画化・ドラマ化された作品がくい違っていると感じたことがある人は、きっと多いはずである。本章での解説をもとに、自分の好きな作品のくい違いについて、自分なりにその理由を考えてみてはいかがだろうか。

第三章では、平野多恵氏が「おみくじ」をテーマに、「なぜ和歌が書かれているのか」を、「文献資料」のデータを用いて、「文学」の視点からアプローチしている。

誰しも一度は神社やお寺で、おみくじを引いたことがあるだろう。そして、おみくじを引いた大半の人が、まずは吉や凶などの結果と「学問」や「健康」などの項目のところを確認するのではないだろうか。しかしながら平野氏は、おみくじは本来、神仏のお告げであり、おみくじの和歌や漢詩こそが神仏のお告げにあたる、つまり、おみくじで最も大切なのは和歌や漢詩であると、述べている。本章では、神仏のお告げがどのような形式で書かれているかでおみくじを三分類にし、それらの特徴を詳しく解説している。また、院政期

に行われた歌占（巫女が神のお告げを和歌で伝えること）から明治維新の和歌みくじまで、おみくじがどのように変遷を遂げたか、その歴史を伝えている。

本章のテーマは「なぜ和歌が書かれているのか」であるが、この謎が解き明かされるだけでなく、おみくじに関する幅広い知識を得ることもできる。自分が引いたおみくじについて調べてみるのも良いし、本章で登場したおみくじをたずねて、神社やお寺を巡るのもまた、一興かもしれない。

第七章では、吉田幹生氏が「恋愛」をテーマに、「愛情か友情か」を、「文学作品」のデータをを用いて、「文学」の視点からアプローチしている。恋愛と一言で言っても、その概念や意義は、多様かつ広義である。吉田氏は恋愛の中でも、とりわけ「二男一女型」を取り上げ、高校国語の教科書でも有名な、夏目漱石の『こころ』を題材に論じている。

「二男一女型」とは、いわゆる恋愛の三角関係である。二人の男性が、一人の女性に恋をする。その二人の男性が友達同士であるならば、男性は女性への愛情をとるか、男性への友情をとるかで葛藤するだろう。文学作品において、この葛藤がどのように描かれているのか、そして、そもそも二男一女型がどのように描かれているのか。『こころ』だけではなく、古代から中世、近世から近代へと、日本の恋愛文学を通史的にたどっている。

恋愛という普遍的なテーマは、誰しもが興味を持ちうるもので、ほとんどの文学作品で描かれていると言っても過言ではないだろう。

二男一女型の三角関係だけを取り上げてみても、数多くの作品がある。しかしながら、二男一女型を題材にしている作品を、これだけ通史的に詳細に解説している本は、あまり多くない。一読の価値があるゆえ、ぜひ、多くの方に読んでいただきたい。

本書は読者として、日本文化に関心のある高校生、大学生、専門学校生、社会人を想定しているため、どの章も明快な文章で書かれ、また、豊富な写真や厳選されたグラフが使用されており、読みやすくなっている。本書では他にも、和食・スター・敬老の日・なでしこジャパンと、先に紹介した三つと合わせて、我々に身近な日本文化がテーマとして取り上げられている。日本文化を再発見するための一助として、本書はおおいに活躍するであろう。

(二〇一五年三月三十一日発行 二〇〇〇円＋税 風間書房)

(しかのや・ゆうき 本学文学部助手)